

学習者の英語への関心・意欲
—小学校高学年～中学校1年夏と3年夏—

English Learners' Motivation,
5th & 6th graders to 7th & 9th graders

満尾貞行

Sadayuki MITSUO

横浜国立大学

Yokohama National University

Abstract

This paper reports on the results of a series of surveys which were administered to Japanese junior high school students regarding their attitudes about learning English. The survey explored students' initial interest in learning English as well as their levels of interest during the survey period. The first survey was administered at the beginning of the 2011 Spring semester, followed by the second survey at the end of the semester, and the third survey was administered at the end of the 2013 Spring semester. The survey not only sought to determine levels of interest in learning English, but also to identify common factors that contribute to students' interest in learning English. The paper discusses the survey results and provides an analysis of the data.

Keywords

Elementary School, Junior High School, English Learning

1. 背景

小学校外国語活動を学習者の英語能力向上のためにいかに生かすか、また中学校英語教育を生かすために小学校における活動内容はどうかなど、小学校と中学校の連携の必要性が唱えられ、この数年多角的に研究され実践されてきている。このような研究は、今後の日本の英語教育に必要な研究である。しかし、一方では、学習者が小学校で培った関心、意欲を中学校でどう持続し、さらには高めていくか、現在実施されている活動内容、授業や指導等の学校要因と動機づけの関連性を考察する研究も必要である。

教育政策、教員研修等に課題を置くことをマクロ・レベルとすると、ミクロ・レベルの視点は、「教育者による日頃の教育行動」ということになる。つまり、目の前にいる学習者の興味・関心、意欲を高めている要因や、高めるための要因を見出すことである。山森(2004)は、日本の中学校1年生の英語学習に対する動機づけの変化を調査し、入学当初に比べ2学期に著しく動機づけが低くなったと報告している。ベネッセ教育総合研究所(2011)ⁱ⁾の調査結果によれば、中学校1年時7月に既に学習意欲が低くなっている。これは英語学習

開始が早まり、学習意欲が低くなる時期も早まった、と考えられるかもしれない。この傾向は中学校3年生まで続くようである。中学校3年生になると進学等をひかえ、学習意欲に変化が見られることも報告されている(廣森, 2003)。Koizumi and Matsuo(1993)は、日本の中学校1年生の英語学習に対する態度と学習意欲の変化を調査している。この約1年間の縦断調査結果によると、英語学習に慣れるようになるまでの間、学習意欲の減少傾向が続くようである。Lamb(2007)は、インドの中学生学習者を対象に学習意欲の変化を調査している。アンケート調査、インタビュー、面接等により集めたデータを分析し、ほぼ20ヶ月間、学習者の学習意欲が維持されていたことを報告している。これは、「見守られている」という意識が学習者にあれば、それは動機づけになりうるということだろう。Gardner, Masgoret, Tennant, and Mihic(2004)は、中級レベルのフランス語学習者を対象に、動機づけや不安、外国語学習に対する態度の変化を1年間調査している。日々の授業や教室環境といった学習に直接関連する要因に一定の変動が観察されたと報告している。以上のような動機づけや学習意欲の変化を扱った研究は多くあるが、小学校外国語活動と中学校の授業を通して、同じ学習者を調査する縦断的な研究は筆者の知る限り報告されていない。

児童の英語への関心、意欲が高いという報告は、よくある。しかし、この関心、意欲を中学校の英語教育で生徒たちが維持し続けるには、どのような要因があるのかを扱った研究はあまりない。本研究では教育現場の調査を通じて学習者の興味・関心、意欲を高めようとする要因を見出すことに焦点を置いている。学習者が小学校外国語活動の授業、中学校の授業の中で、興味・関心、意欲をどのように持続するのか、または発展・変化させていくのか、進級と共に変化はないのか、もし変化があるなら、それらの変化の要因は何かを探る。

2. 研究目的および調査方法

2.1 研究目的

本研究の目的は、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校(以下、附属中)における英語科授業に先述の要因を探ることである。研究に一定の成果が見られれば、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校(以下、附属小)における小学校外国語活動に生かしていくことも、中学校英語科での今後の指導の参考にすることも可能である。小学校で観察される活動と中学校で観察される活動の多くは異なる。しかし、その中で共通の動機づけ・動機維持要因を見出せる可能性も否定できない。一般に学習者の関心、意欲は学校要因以外にも多くあるが(Clement, 1980)、本稿では、授業が直接的に関連していると思われる要因、つまり授業内の指導や活動に焦点を絞る。本研究はその目的から、以下の4点を研究課題とする。なお、「関心、意欲を高めること」は、動機づけと同じ意味として扱う。

- ① 附属中1年生は、小学校外国語活動の授業で、英語への関心、意欲を高めて附属中に進んできているか。
- ② 関心、意欲が高められている場合、どういった活動等がその要因となったのか。
- ③ 小学校外国語活動を通して英語への関心、意欲を高めている要因は中学1年生とし

て、また3年生として学ぶ英語の授業にも見出せるのか。

- ④ 附属中の授業のどのような活動が英語への関心、意欲を持続、または高めているのか。

2.2 調査方法

授業観察(質的データ)、アンケート(量的・質的データ)によりデータ収集を行う、いわゆる質的・量的なリサーチ・デザインを適用した triangulation による研究である。量的データはアンケートの回答である。アンケートにより、質問項目に関する回答を対象生徒(1年次、3年次)より得る。質的データは、アンケートの記述回答、授業観察の記述記録である。

2.2.1 データの種類と収集方法

- (1) 附属小における小学校外国語活動でのアシスタントのジャーナルと授業観察記録

平成22年度に横浜国立大学教育人間科学部および大学院研究科の学生に、附属小(5年生、6年生)の小学校外国語活動の授業をアシスタントとして手伝ってもらい、ジャーナルを書いてもらった。また、筆者は授業観察、ビデオ観察をすることでジャーナル内容の確認をとると共に、記録をとった。

- (2) 平成23年度入学の附属中生徒へのアンケート調査(1年次4、7月、3年次7月)

アンケートの質問内容は、附属中英語科との共同研究の一環として、中学校教員と共同で作成したものである。

- (3) 附属中1年生の授業観察と記録

筆者による附属中1年生の英語授業の観察およびその記録である。

2.2.2 データの分析方法

- (1) 小学校外国語活動に関するアンケート調査データの分析

質的データであるアンケートの記述回答は、分類をして特徴を見出すようにした。この分類作業では、Lynch(1992)の effects matrix, site dynamics matrix を参考に独自の matrix (以下 triangulation matrix とする)を作成、使用した。

回答は回答者の記憶を頼りにしている。信頼性を高めるために、附属小の小学校外国語活動ビデオ記録、学生のジャーナル、筆者の記録で回答の確認をとるようにした。附属中の生徒の半数は他の小学校(主に公立小)出身であり、この半数に関する回答を確認できるようなデータはないため、ベネッセ教育総合研究所(2011)の全国規模の調査結果等をその代替とした。

- (2) 附属中英語科の授業に関するアンケート調査データの分析

この分析にあたり、疑問点は、筆者の授業観察記録や附属中英語科教員へのインタビューで確認をとることで、解消に努めた。

- (3) 附属中の授業分析

回答者1年次のときのみ、授業の特徴をまとめた。

3. 調査結果

3.1 附属中1年生は、小学校外国語活動の授業で、英語への関心、意欲を高めて附属中に進んできているか

表1で示すように、「小学校での英語活動の時間は、楽しかったか」という質問(「1. とても楽しい」「2. 楽しい」「3. やや楽しい」「4. あまり楽しくない」「5. 楽しくない」「6. わからない」からの六択)に対し、回答者数は129名、平均2.26であった。

「1. とても楽しい」「2. 楽しい」で回答者の約60%、「3. やや楽しい」も含めると90%以上になる。附属小から入学した生徒63名の回答のみにすると、「1. とても楽しい」が15名、「2. 楽しい」が22名、「3. やや楽しい」が21名で、否定的な回答(「4. あまり楽しくない」「5. 楽しくない」)は4名、無回答1名であった。英語圏からの帰国生は若干であり、統計的な数値への影響の大きな要因とはなっていない。

表1 小学校外国語活動と英語への興味・関心

小学校での英語活動の時間は楽しかったか	回答者数	範囲	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
	129	5	1	6	2.26	1.099	.982	1.543

中学1年生が、小学校外国語活動を楽しいと回答する傾向は、ベネッセ教育総合研究所(2011)ⁱ⁾の調査結果でも出ている。附属中に入學してきた中学1年生の回答も同じ傾向を示している。次に、小学校外国語活動のこういった授業内容を楽しいと思ったのかを検討する。

3.2 関心、意欲が高められている場合、こういった活動等がその要因となったのか

表2は小学校の授業で実際に体験したり練習したりした英語活動を選んでもらったものである(複数回答可)。「1. 中1年生」で、「英会話」「英語の歌やダンス」「英語のゲーム」を体験・練習している生徒が多いことがわかる。「2. 附属小出身」の各活動の比率も「1. 中1年生」とほぼ同じである。

表2 小学校の授業であった活動

	英会話	英語の歌やダンス	英語のゲーム	アルファベット(読み・書き)	フォニクス	英語劇	スピーチ	英語の絵本の読み聞かせ	その他
1. 中1年生 (計129名)	99	109	128	46	15	16	70	20	2
2. 附属小出身 (計63名)	44	56	62	10	6	0	34	3	0

(複数回答、無回答・不明除く、単位：名)

また、表3は、3.1で扱った「小学校外国語活動の時間は楽しかったか」という質問へ肯定的(「1. とても楽しい」「2. 楽しい」「3. やや楽しい»)に回答した生徒に、「どういった活動が楽しかったか」を質問したものである(複数回答可)。中1年生で肯定的に回答した生徒(117名)の82.9%にあたる97名が「英語のゲーム」、27.3%にあたる32名が「英語の歌やダンス」、28.2%にあたる33名が「英会話」と回答している。そのうち、附属小出身者に絞った場合は、「4. 上記「3」のうち附属小出身」で、57名の91.2%にあたる52名が「英語のゲーム」と回答し、「英語の歌やダンス(17名, 29.8%)」「英会話(11名, 19.2%)」「スピーチ(7名, 12.2%)」と続いている。附属小出身者も附属小外出身者も、その多くが楽しかった活動として「英語のゲーム」、次いで「英語の歌やダンス」を挙げていることがわかる。

表3 小学校の授業で楽しかった活動

「小学校外国語活動の時間は楽しかった」と回答した生徒	英会話	英語の歌やダンス	英語のゲーム	アルファベット(読み・書き)	フォニックス	英語劇	スピーチ	英語の絵本の読み聞かせ	その他
1. 中1年生(計117名)	33	32	97	11	3	8	24	4	0
2. 附属小出身(計57名)	11	17	52	2	0	0	7	0	0

(複数回答, 無回答・不明除く, 単位: 名)

英語のゲームを好んだ理由は、授業で扱われた回数、つまり頻度が高かったからであろうか。頻度と学習者の好みが比例するなら、「1. 中1年生(計129名)表2」と「1. 中1年生(計117名)表3」、「2. 附属小出身(計63名)表2」と「2. 附属小出身(計57名)表3」をそれぞれ比較した場合、統計的に有意差はでないはずである。Wilcoxonの符号付き順位検定で、「1. 中1年生(計129名)表2」と「1. 中1年生(計117名)表3」次に「2. 附属小出身(計63名)表2」と「2. 附属小出身(計57名)表3」の関連性を調べたところ検定統計量 $z = -2.606$, $p < .01$ で「1. 中1年生(計129名)表2」と「1. 中1年生(計117名)表3」には有意差があった。また、「2. 附属小出身(計63名)表2」と「2. 附属小出身(計57名)表3」は、 $z = 2.521$, 検定結果: $.01 < p < .05$ で、やはり有意水準5%で帰無仮説は棄却され、「有意水準5%で差がある」ことがわかった。つまり中学1年生全体でも附属小出身者のみに絞った場合でも、小学校の授業であった様々な英語活動への好みは、各活動の行われた頻度によるものではなく、内容的な好みが理由であると解釈できる。大下(2007)によれば、小学校教員が重要な英語活動として一番に挙げているのは「英語を使ってみる体験」である。

次に「小学校の英語活動で印象に残っていることを具体的に書いてください。」の記述回答を分類した。分類作業では、Lynch(1992)の effects matrix, site dynamics matrix を参考に matrix を使用した結果、(1)～(4)に分類された。

- (1) 歌やチャンツ、ゲーム等で声に出して英語を楽しく発音した。
- (2) 英語で話して、コミュニケーションをとった。
- (3) 単語レベルではあるが、「発音できた」「ゲーム等の活動中に習った単語を使えた」という学習達成感を得た。
- (4) 全体にみんなで協力して楽しかった。

廣森(2006)は、自己決定理論に基づき、英語学習場面においては、学習意欲の高さと「自律性」「有能性」「関係性」などの心理的欲求の高さが連動している(一方が高いともう一方も高い)と報告している。上述の一連の活動が廣森(2006)のいう心理的欲求度を満たす条件をある程度備えているのではないかと考える。無論、信頼性の高いデータとその分析を踏まえた上での慎重な議論が必要である。

以上の4点の共通点は、「英語でコミュニケーションをとる、英語を使ってみる」である。大下(2007)の結果、またベネッセ教育総合研究所(2011)¹⁾のアンケート調査結果と一致していると言える。以上から、学習者がゲームを好む理由は、授業での頻度によるものというよりは、活動の特徴によると言える。その特徴とは、①英語を使う、②英語でコミュニケーションをとる、③みんなで協力する、と言える。英文を読む・聞くという行為もスキーマを活性化し自分の英語の知識を積極的に使うという意味では、英語を使うということになるが、①の意味は話す(output)・聞く(input)という活動のことである。outputをして自分の話し相手とコミュニケーションをとる(②)。何のためにコミュニケーションをとるかということ、一緒になって協力し合ってゲームや課題等に取り組むためということである(③)。そういう意味では様々なタイプの活動が含まれるタスク型の言語活動は典型的な①、②、③の特徴を満たした例であろう。

また、記述回答を分析したところ、ネガティブな回答が10個あり、3つのタイプに分類された。

- a. 「英語を習っている子に合わせて授業をしている感じがした。英語への苦手意識を持ってしまった」といった授業についていけなかったと回答しているタイプ。
- b. 「全て知っていて、発音もたまに違い(自分が慣れ親しんだものと比べて、という意味)、退屈だとイライラする」という帰国生に多い回答タイプである。例えば附属小出身者であり英語を第一言語もしくは第二言語で使用する国からの帰国生である。
- c. 内容がつまらないというものである。「外国語活動で使われている教材」で扱われているトピックも今後の課題の1つと言える。

筆者が2008年当時勤務していた大学のメンバーおよび学生が、公立小学校の5,6年生を対象にした「英語恐竜キャンプ」を実施した。国立博物館 地球館の恐竜セクションでの一泊二日の英語学習を目的としたキャンプである(満尾, 2008)。泊まれるスペースの問題もあり、20名程度の参加数に抑えた。参加希望者は英語に興味があるのではなく、恐竜に興味のある小学生ばかりで、英語は嫌いという子がほとんどであった。小学校での英語活動内容がつまらないというのが主な理由であった。しかし、キャンプ終了直後と1ヶ月後の調査によると、この恐竜キャンプを通して彼らの英語への興味はとて高まったことがわかっ

た。a.の問題は、今後大きくなる可能性がある。小学校の英語教育が定着し盛んになるのにしたが、塾等に通う小学生の数が増え、学習内容も高度化する可能性はないだろうか。しかし全員が塾等に通えるわけではないことも考慮していく必要があるのではないか。

3.3 小学校外国語活動を通して英語への関心、意欲を高めている要因は中学1年生として、また3年生として学ぶ英語の授業にも見出せるのか

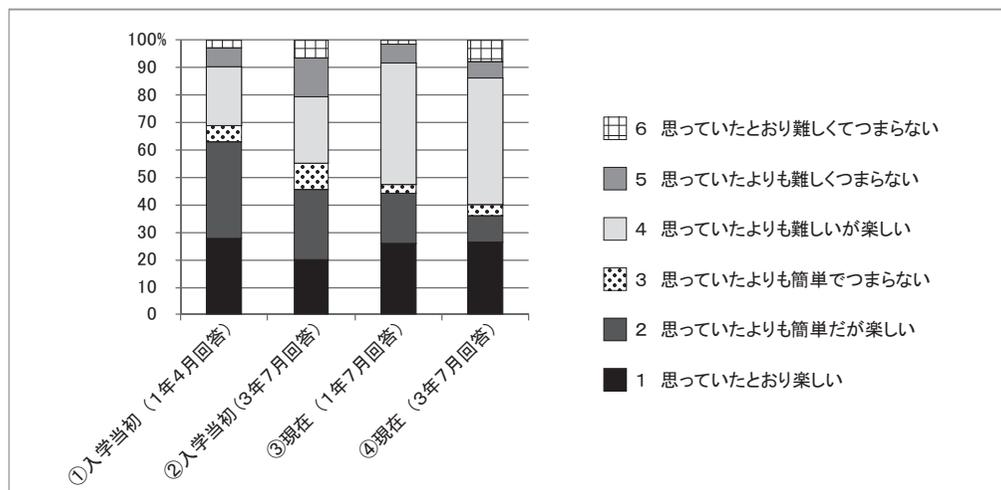
3.3.1 中学の英語は楽しいか

表4のようなアンケートを行った。

表4 想像していた学習と実際の学習

質問：自分が想像していた学習と比べて実際の授業はどうでしたか？	
①1年次4月 / ②3年次7月 入学当初(4月ごろ)の気持ち	③1年次7月 / ④3年次7月 今現在の気持ち
1 思っていたとおり楽しい	
2 思っていたよりも簡単だが楽しい	
3 思っていたよりも簡単でつまらない	
4 思っていたよりも難しいが楽しい	
5 思っていたよりも難しくつまらない	
6 思っていたとおり難しくつまらない	

結果を図1に示す。



注：回答数は、①132、②120、③131、④117であった(単位：名)。

図1 「中学の英語の授業は楽しいか」アンケート結果

1年次の回答(①と③)を見ていく(図1)。共に、英語科の授業に対して肯定的で「1 思っ

ていたとおりに楽しい」「2 思っていたよりも簡単だが楽しい」「4 思っていたよりも難しいが楽しい」の回答数が多い。4月と7月の回答では、大きな変化も見られる。4月に比べると7月は「2 思っていたよりも簡単だが楽しい」が減少し、「4 思っていたよりも難しいが楽しい」が増加している。ここから、全体に英語の学習を難しいと思う生徒の数が増えたが、難しいと感じつつも英語学習を楽しみと思う傾向が強くなったといえる。4月ごろの気持ちと7月現在の気持ちを統計的に処理すると、英語の授業に対する気持ちに統計的な有意差を示す変化が見られた($t=-3.051$, $p=.003$)。

次に、「現在(1年7月回答)」の回答を選択肢1～3の回答と4～6の回答で分け(選択肢4～6は「難しい」という感想を含んでいる)、カイ2乗検定で確認したところ、 $\chi^2(1, N=131)=25.552$, $p=.000$ で有意差が出た。中学1年次7月の段階で「難しい」と感じている生徒の方が、感じていない生徒より、統計的にも多いということがわかった。

1年次の①と③の回答を「英語の授業が楽しい・つまらない」でカテゴリー分けすると、4月(楽しい111人・つまらない21人)、7月(楽しい116人・つまらない15人)と興味・関心があると回答した学習者が圧倒的に多く、5名増えている。図1より附属中1年生は、全体としては、4月から7月の間に英語の授業を難しいと思い始めた傾向はあるが、学習への興味はやや強まったとも言えそうである。

次に、「秋以降に特に伸ばしていきたいと思う力は次のうちどれですか。1番目と2番目を書いてください。」への回答について、表5で見してみる。

表5 秋以降伸ばしたいスキル

英語学習への感想	秋以降伸ばしたいスキル										合計	
	1話す力		2聞く力		3書く力		4読む力		5文法学習		1年	3年
アンケート時期 *	1年	3年	1年	3年	1年	3年	1年	3年	1年	3年	1年	3年
1 思っていたとおりに楽しい	20	12	5	8	5	4	0	3	4	4	34	31
2 思っていたよりも簡単だが楽しい	14	4	0	3	5	3	1	0	4	1	24	11
3 思っていたよりも簡単でつまらない	4	2	0	1	0	2	0	0	0	0	4	5
4 思っていたよりも難しいが楽しい	17	15	9	9	19	16	3	4	10	10	58	54
5 思っていたよりも難しくつまらない	0	1	1	1	6	2	0	1	2	1	9	6
6 思っていたとおりに難しくつまらない	1	4	0	0	0	4	0	1	1	0	2	9
合計	56	38	15	22	35	31	4	9	21	16	131	116

(*1年：1年次7月の回答・3年：3年次7月の回答、単位：名)

1年次において「1 思っていたとおりに楽しい」「2 思っていたよりも簡単だが楽しい」「4 思っていたよりも難しいが楽しい」といった英語学習への肯定的な回答を選択している生徒の多く

は、「話す力」(51名)「書く力」(29名)をもっと伸ばしたいと回答している。そして、表5より英語で理解するより、英語で表現したい、という点に興味が集まっていることにも注目したい。「発信型」学習に興味が集まるのは、小学校外国語活動が楽しかった理由と一致する。

図1より、3年も1年同様に「1 思っていたとおりに楽しい」「2 思っていたよりも簡単だが楽しい」「4 思っていたより難しいが楽しい」の回答が多く、英語学習に対して肯定的であると言える。「1 思っていたとおりに楽しい」の回答者の多くが1年次(34名)は「話す力」(20名)を伸ばしたいと回答しているのに比べて、3年次(31名)は「読む力」(3名)「書く力」(4名)「聞く力」(8名)「文法学習」(4名)にもやや分散している。この回答者の中には海外経験者が含まれており、帰国後の様々な要因が考えられる(例えば、語彙力をさらにアップするために様々な原書に挑戦している、英語の accuracy を上げるために書く力をつける、など)。次に、3年次において「1 思っていたとおりに楽しい」「2 思っていたよりも簡単だが楽しい」「4 思っていたより難しいが楽しい」と回答した生徒が、四技能の特にどのスキルに興味があるのかを見ると(表5)、多くが今後伸ばしたいスキルとして「話す力」と回答していた。また、「4 思っていたより難しいが楽しい」と回答した者の多くが「話す力」「書く力」「文法学習」を挙げている。この「4 思っていたより難しいが楽しい」と回答したグループは、今後伸ばしたいスキルに、他のグループと同様「話す力」を挙げているが、それに加えて、「書く力」「文法学習」を挙げている点を考えると、「難しい」と感じることで「書く力」「文法学習」に関連があると考えられる。高校受験も大きな要因の一つであり得るが、進級と共に英語学習が難しくなっているにもかかわらず、「発信型」の志向が強いのは1年次より変わっていない。

3.3.2 中学の英語の授業は、自分にとってプラスであるのか

次に下記の3つの質問への回答と、表4の質問項目③1年次7月「今現在の気持ち」、④3年次7月「今現在の気持ち」の回答、合計5つの回答の関連性を調べ、表6-1~3にまとめた。5つの回答の間に高い相関率があり、 $p<.01$ で有意であった。

3つの質問

①「英語科で培われると思われる力が身につけてきたか」

(1 そう思う, 2 どちらかと言えばそう思う, 3 どちらかと言えばそう思わない, 4 そう思わない)

②「自分の考えを深めたり、新たな発見をする機会があったか」

(1 そう思う, 2 どちらかと言えばそう思う, 3 どちらかと言えばそう思わない, 4 そう思わない)

③「英語の授業の中で関心が広がったり、学ぼうという意欲が高まったりするなど、自分自身の成長に気づくことがあるか」

(1 そう思う, 2 どちらかと言えばそう思う, 3 どちらかと言えばそう思わない, 4 そう思わない)

左側に「難しくない」「難しい」とあるが、これは1年次7月(および3年次7月)のアンケート調査の段階で、英語を難しいと回答した生徒と難しいとは回答していない生徒を分けた結

果である。各グループの上述の質問への回答の傾向を調べるためである。表6が示すように、7月になって英語の授業は難しいと思っている学習者でも、質問④、⑤に肯定的「1 そ

表6-1 質問④「英語科で培われると思われる力が身についてきたか」

	質問④							
	1 そう思う		2 どちらかと言えば そう思う		3 どちらかと言えば そう思わない		4 そう思わない	
アンケート時期 *1	1年	3年	1年	3年	1年	3年	1年	3年
難しくない *2	30	22	27	23	4	2	0	0
難しい*3	13	18	46	43	7	9	1	0
合計	43	40	73	66	11	11	1	0

(単位：名)

表6-2 質問⑤「自分の考えを深めたり、新たな発見をする機会があったか」

	質問⑤							
	1 そう思う		2 どちらかと言えば そう思う		3 どちらかと言えば そう思わない		4 そう思わない	
アンケート時期 *1	1年	3年	1年	3年	1年	3年	1年	3年
難しくない *2	23	15	34	29	4	3	0	0
難しい*3	12	17	45	43	8	9	1	1
合計	35	32	79	72	12	12	1	1

(単位：名)

表6-3 質問⑥「英語の授業の中で関心が広がったり、学ぼうという意欲が高まったりするなど、自分自身の成長に気づくことがあるか」

	質問⑥							
	1 そう思う		2 どちらかと言えば そう思う		3 どちらかと言えば そう思わない		4 そう思わない	
アンケート時期 *1	1年	3年	1年	3年	1年	3年	1年	3年
難しくない *2	33	28	20	14	8	5	0	0
難しい*3	19	20	34	36	12	13	1	1
合計	52	48	54	50	20	18	1	1

(単位：名)

表6-1, 2, 3共通の注釈

*1 1年：1年次7月の回答，3年：3年次7月の回答

*2 表3の質問③④のうち「1 思っていたとおり楽しい」「2 思っていたよりも簡単だが楽しい」「3 思っていたよりも簡単でつまらない」の回答の合計

*3 表3の質問③④のうち「4 思っていたよりも難しいが楽しい」「5 思っていたよりも難しくつまらない」「6 思っていたとおり難しくつまらない」の回答の合計

う思う」「2 どちらかと言えばそう思う」な回答が多い。しかし、質問◎「英語の授業の中で関心が広がったり、学ぼうという意欲が高まったりするなど、自分自身の成長に気づくことがあるか」という質問に対して1年生では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の回答の合計が106で、「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」の回答の合計が21である。英語学習への意欲に関するこの質問への回答結果は、英語学習が難しくなるにしたがって、意欲がなくなっていく兆候を示しているのかもしれない。

次に3年次の回答と1年次の回答を比べる。表6の質問④⑤に対する回答は1年次と3年次で大きな変化はない。質問④の「そう思う」は、「英語は難しくない」と1年次に回答したグループのうち、1年次に30名が、3年次に22名がこのように回答している。8名の減少は大きな変化のようにも思えるが、8名のうち、他の中学校(私立など)へ転校した者や、アンケート当日、回答をしていない者も入っていることを考慮すると、大きな変化とは判断しにくい。3つ目の質問◎(表6-3)は、1年次回答者のうち、「1 そう思う」「2 どちらかと言えばそう思う」が、それぞれ52名、54名で、回答者(127名)全体の84%であった。3年次回答者のうち、「1 そう思う」「2 どちらかと言えばそう思う」が、それぞれ48名、50名で、回答者(117名)全体の84%と1年次の割合と変化がない。しかし、詳しくみると、「(英語学習)難しい」と回答し、質問◎に「2 どちらかと言えばそう思う」と回答した割合は、1年次27%から3年次31%とやや増加している。質問◎の回答は、1年次、3年次共に肯定的であるが、3年次はやや肯定的な回答の割合は減ったかもしれない。しかしながら、特筆すべき点は、質問④、⑤、⑥の回答からわかるように、附属中の回答者である生徒たちの英語学習への関心、意欲が入学時から高いまま、ほぼ維持されている点である。次の3.4で小学校時に英語学習に興味関心があった要因と、中学校1年次、3年次における関心、意欲の高さの要因を考えたい。

3.4 附属中の授業のどのような活動が特に英語への関心、意欲を持続、または高めているのか

小学校の英語活動で「英語のゲーム」が楽しかったと回答した学習者は、中学の英語の授業で、どのような活動を楽しんでいるのかを調べた(表2、中1生の2011年7月回答、したがって中1の授業についての回答)。「歌」は回答者全体の53%にあたる68名(128名中)、「Sam先生(ALT)との授業」は56%の72名であった。附属小出身者のみに絞った場合でも、「歌」は54%の34名(63名中)、「Sam先生との授業」は56%の35名と同じような結果が出た。他の活動はあまり高くなかった。

Sam先生(オーストラリア人、男性)は、教室内を動き回りながら、既習の表現を用いて、生徒に英語で質問をしていく。teacher talkをうまく活用する教員で、rephrasing, correction等、生徒の発した英語のフォームの指導もその都度行うが、confirmation等、内容重視のフィードバックも頻繁に行い、生徒の話した英語の内容に敏感に反応し、ユーモアを交えて、生徒との間にsustained speechをもととする姿勢を示す。生徒たちも彼が、自分に対してだけではなくクラスメートに話す英語に敏感に反応し、楽しんでいることが観察できる。歌は、調子よく歌うわけではないが、リラックスして全員声を出して(クラスによっては小声であるが)いることが観察される。こういった活動は、以降で述べるような小学校にお

ける英語のゲームと同じ要素を含んでいる。

附属小の英語活動は、主に歌と英語のゲームである。附属中に入学してきた公立小出身者は、学年の半分にあたる。出身公立小の英語活動内容も把握しているべきであるが、調査が進んでいないため、ここでは附属小のみに限定する。英語のゲームといっても、児童間、T1と児童の間、T2と児童の間等で、目的のある、インフォメーション・ギャップの考え方を基本に据えたコミュニケーション活動をすることが中心である(T1はクラス担任であり、T2はボランティアの方や横浜国立大の英語を専攻する学部生・院生)。Sam先生との授業との共通点は、「英語で発話し、意味のある、内容重視のコミュニケーションを図ること、図ろうとすること、児童相互間のコミュニケーションが常に保たれていること」であり、扱う教材は「学ぶ者にとって身近で興味がわき、役立つ」ものである。

また、「英語学習でつきたい力」についての回答(複数回答可)では、「英語のゲーム」を選択した回答者の41名が、「外国の人と英語で話せるようになりたい」を選んでおり、積極的なコミュニケーション志向があることを窺わせる。ベネッセ教育総合研究所(2011)は、回答の因子分析結果として、回答者である生徒たちが持つ英語学習への動機は、①コミュニケーション能力の向上、②英語が好き・面白いと報告している。附属小・他の小学校における英語活動、および附属中における英語の授業が楽しい要因の一つが、「英語で発話し、意味のある、内容重視のコミュニケーションを図ること、図ろうとすること」であったことからすると、ベネッセ教育総合研究所(2011)での分析結果の①と②の間には、相互関係があると言える。また、表5に示したように、今後伸ばしたいスキルは、「話す力」であり「書く力」であったとおり、発信型志向の学習が多く、コミュニケーションしたいということが学習動機になっていることに間違いはない。

この傾向は3年次にも見ることができるのか。「英語の授業の中で関心が広がったり、学ぼうという意欲が高まったりするなど、自分自身の成長に気づくことがよくあるか。(四択)」の質問の回答は、「そう思う(48)」「どちらかと言えばそう思う(50)」「どちらかと言えばそう思わない(18)」「そう思わない(1)」であった。そのうち「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した生徒に、「関心を広げたり意欲が高まったりする活動」を選択(複数可)してもらった(表7)。

選択数の多かったものは、「歌」「話す活動」「Sam先生との授業」「アクティビティ、ペアワーク」である。3.2において小学校時に英語のゲームを好む理由として「①英語を使う(歌、話す)、②英語でコミュニケーションをとる、③みんなで協力する」を挙げたが、表7より中学校3年次における興味ある活動も基本的なところは同じと言え、さらに高度な「書く活動」「スピーチ(発表)」が加わっている。附属中英語科の授業は、3年間を通して、発信型であり協力し合う活動が組み込まれていると言える。生徒たちが受ける授業は日々難しくなっているにもかかわらず、英語学習への興味、意欲は高い。

3年次7月のアンケート調査では、図2に示した例のように英語への自分の興味・関心を線で描いてもらった。それらを見ると、以下の3パターンが多かった。

表7 中3の7月時点で興味や意欲を高める活動

活動内容	「そう思う」+「どちらかと言えばそう思う」	活動内容	「そう思う」+「どちらかと言えばそう思う」
(1) 発音練習 (フォニックス)	15	(8) アクティビティ, ペアワーク	42
(2) 歌	65	(9) Sam 先生との授業	54
(3) 教科書の音読	23	(10) 文法に関する学習	32
(4) 教科書内容理解	30	(11) スピーチ(発表)	52
(5) 話す活動	54	(12) Q&A	21
(6) 書く活動	42	(13) その他	4
(7) 聞く活動	29		

(単位：名)

* 質問「英語の授業の中で、関心が広がったり、学ぼうという意欲が高まったりするなど、自分自身の成長に気づくことがあるか」に「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した生徒に聞いた結果

- ① 中2春から秋にかけて一度落ち込み、その後盛り返すパターン。
- ② 1年次はずっと低迷しているが、だんだんと上昇するパターン。
- ③ 3年間ずっと高いパターン。

この傾向は、ベネッセ教育総合研究所(2011)や他の調査結果とやや異なる。生徒たちに描いてもらった「グラフ」を見る限りは、「低い」時期があまりない。

例)

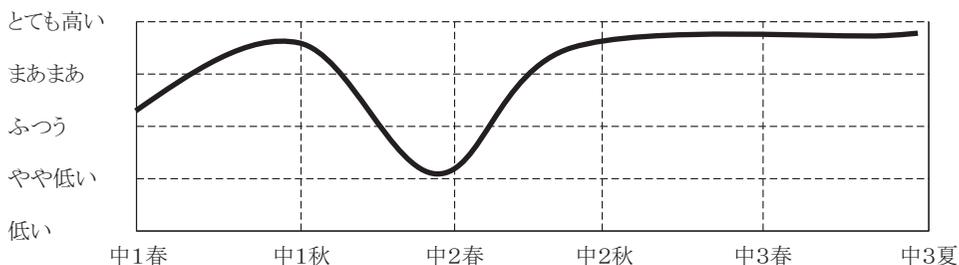


図2 中学校3年間の英語への気持ちの変化

廣森(2006)は、自己決定理論に基づき、英語学習場面においては、学習動機づけの高さと「自律性」「有用性」「関係性」などの心理的欲求の高さが関係している(一方が高いほどもう一方も高い)と報告している。このような心理的欲求を満たす要素が言語活動に含まれているかについては、本稿では論じていないが、これらの要素が、英語発信型の学習および協力し合う学習、言い換えれば、話し手同士のコミュニケーションへの関わりについて考えた社会文化論的アプローチ(Swain, et al, 2011)と重なっていると考えられる。

4. まとめ

本稿では英語学習における学習意欲を高める要因を探るために、英語学習者の学習意欲、興味に関するアンケート調査を中学入学時、中学校1年次7月、中学校3年次7月の3

回ほぼ同じ英語学習者を対象に行うと共に、小学校6年次の英語活動、中学校1年次の英語科授業の観察を実施し、それらをデータとして分析することを試みた。結論として、①自己表現、発信型の英語学習、②クラス内の英語によるコミュニケーション、③協力の三要素が学年や英語の学習進度にかかわらず、学習意欲を高め維持していく上で、大事な要素であることが確認できた。授業における指導の上でも、授業分析・評価の上でも大事な要素である。発信型重視ということは、逆説のように聞こえるかもしれないが、英文を読むこと、聞くことをもっと指導する必要があるということでもある。つまり、自己表現力をつけるには英語への「接触量」を増やすことが不可欠で、この点を見逃していけない。今後、学習指導要領が変わり、カリキュラムが変わっても、この点だけはしっかりと押さえるべきではないだろうか。

注

- i) 「小中高をつなげる視点から」をキーワードに、上智大学国際言語情報研究所・上智大学言語学会・ARCLE・(株)ベネッセコーポレーション共催による「上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム」で、上智大学 吉田研作氏、東京外国語大学 長沼君主氏、ベネッセ教育総合研究所 沓澤糸氏による中学1年生を対象に英語学習観のアンケート調査結果の発表が行われた(所属は発表当時のもの)。

参考文献

- Clement, R. (1980). Ethnicity, contact and communicative competence in a second language. In H. Giles, W. P. Robinson, & P. Smith (Eds.), *Language—Social psychological perspectives* (pp. 147-154). Oxford, England: Pergamon Press.
- Gardner, R. C., Masgoret, A-M., Tennant, J., & Mihic, L. (2004). Integrative motivation—Changes during a year-long intermediate-level language course. *Language Learning*, 54, 1-34.
- Koizumi, R., & Matsuo, K. (1993). A longitudinal study of attitudes and motivation in learning English among Japanese seventh-grade students. *Japanese Psychological Research*, 35, 1-11.
- Lamb, M. (2007). The impact of school on EFL learning motivation—An Indonesian case study. *TESOL Quarterly*, 41, 757-780.
- Lynch, B. (1992). Evaluating a program inside and out. In J. C. Alderson & A. Beretta (Eds.), *Evaluating second language education*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swain, M., Kinnear, P. & Steinman, L. (2011). *Sociocultural theory in second language education: An introduction through narratives*. Bristol, England: Multilingual Matters.
- 大下邦幸 2007. 「小中連携の実態 アンケート調査結果から」 松川禮子・大下邦幸編『小学校英語と中学校英語を結ぶ』, pp.25-61. 高陵社書店.
- 廣森友人 2003. 「発達の視点に基づいた動機づけの検討—高校生英語学習者の場合」 *HELES*

Journal, 3, 71-81.

廣森友人 2006. 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』 多賀出版.

ベネッセ教育総合研究所 2011. 「小・中学校の英語教育に関する調査・速報版」

Available: http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syochu_eigo/2011/soku/index.html [2013年12月]

満尾貞行 2008. 「恐竜と小学生と英語」『英語教育』 3月号, pp.65-67. 大修館書店.

山森光陽 2004. 「中学校1年生の4月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか」『教育心理学研究』 第52巻 第1号, pp.71-82.